九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

伊庭可笑作『珍説雷姻禮(ちんせつかみなりのこんれい)』翻刻と注釈 ：(附)前稿「黄表紙作者伊庭可笑についての基礎研究」追記

園田，豊

https://doi.org/10.15017/4742082

出版情報：雅俗. 18, pp.98-113, 2019-07-16. 雅俗の会
バージョン：
権利関係：著作権保護のため論文中の図は非表示

◉研究ノート

伊庭可笑作『珍説雷姻禮』翻刻と注釈

―（附）前稿「黄表紙作者伊庭可笑についての基礎研究」追記―

園田　豊

底本　東京都立中央図書館加賀文庫蔵（請求記号：函三〇－一八）
中本、上下二巻二冊、全十丁。
刊年　天明二（一七八二）年
画工　鳥居清長
板元　岩戸屋
柱刻　「ちんせつ　一（～十）」

凡例

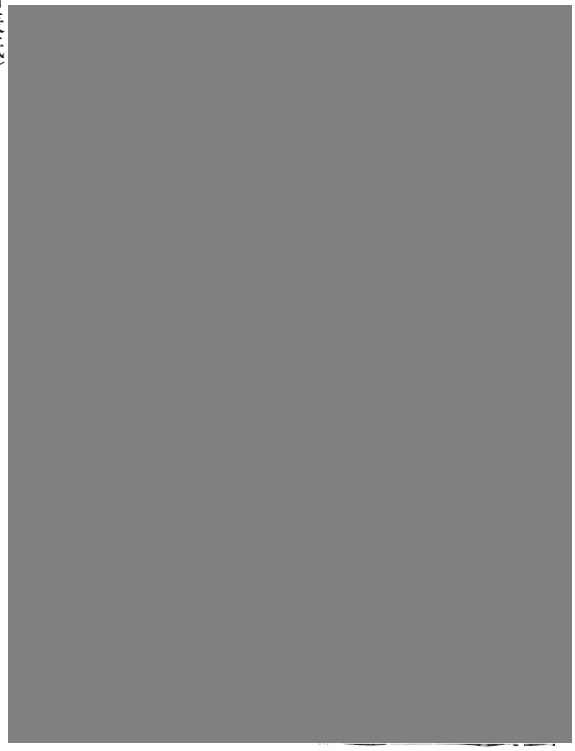
翻刻にあたって、次のような方針によった。

1　原文はほとんど平仮名書きで句読点を欠く為、適宜漢字に直し、句読点を補った。元の仮名は振り仮名として残した。
2　原文の仮名遣い、送り仮名の不備等はそのままとした。
3　濁点、半濁点を適宜補った。
4　漢字・慣用字については、原則として、新字体・現行の字体を採用したが、定本の表記に従ったものもある。
5　反復記号「〳〵」「ゝ」「ゞ」は原則としてそのまま残した。
6　人物の科白には「　」を付け、人物名を上に（　）で示した。

また、注釈を施した語句・文章には番号を付した。書誌・注釈・補足は、翻刻より二字下げて記した。

〈前表紙〉

著作権保護のため図は非表示



〈前表紙〉

原表紙。

珍説雷姻禮　全

後題箋、後人の墨書。

著作権保護のため図は非表示

〈前表紙裏〉

[redacted]

〈上〉

〈一丁オモテ〉

[redacted]

〈前表紙裏〉

珍説雷婀禮　上　はん元

岩戸屋

文字題簽（原題簽）。色は薄い紺。

ちんせつ上

絵題箋（原題簽）。三色刷り。

一丁ウラ～二丁オモテの内容を示す画。

※本来、文字題簽と絵題箋は、前表紙に貼付されているものであるが、底本の加賀文庫本では、前表紙裏に貼付されている。

〈上〉

〈一丁オモテ〉

昔より雷を嫌ふは、その者の(1)生得性に当たり、どの様な勇気ある者も甚だ恐るゝものなり。こゝに(2)戸右ヱ門と言ふ者、夫婦(3)掛向にて、いと(4)微かなる暮らしなりしが、女房を(5)おかやとて、(6)人洗濯等して明け暮れ稼ぎける故、ついに(7)鬢差を入れて髪を取上げたる事もなく、取り乱しゐれども、美しき事、(8)蠟石細工の(9)天人かと怪しむ程の女なり。

(戸右ヱ門)「今日もおかしな(10)空合だ。洗濯物はよしやれ。(11)どふかごろ付そふで気味が悪い」

(1) 生まれつきの性質。(2) 雷が鳴ると、雷を恐れて戸棚へ駆け込む所から付けた名。(3) さし向かい。(4) 目立たない。(5) 雷が鳴る時、蚊帳の中にいると安全という所から付けた名。(6) 手間賃を貰って他人のものを洗濯すること。(7) 女髪の鬢の中に入れて、左右に張り出させるのに用いる。(8) 白蠟のように色白で、きめの細かい肌をした美人。

著作権保護のため図は非表示

〈一丁ウラ〜二丁オモテ〉

（9）天女。（10）空模様。（11）どうも雷がゴロゴロ鳴りそうで。

※裕福ではないが、仲睦まじそうな夫婦の姿が描かれる。

〈一丁ウラ〜二丁オモテ〉

折しも、夏の事なりしが、おかやは洗濯せんと外へ出でしに、忽ち空かき曇り、凄まじき雷にて、戸右ヱ門は早々（1）戸棚へ駆け込み、息を殺して居たりける。

こゝに又、（2）筑波の雷、少し用事ありて此所を通りかゝり、おかやが美しきに見とれ、思はず雲を踏み外して、すとんと落ちたり。おかやは夫の嫌いなれば、介抱せんと、盥も洗濯物も捨てゝ駆け入らんとせしを、雷に捕らへられ難儀する。

（雷）「これ〳〵、あの様な雷 位を怖がる亭主を持っていよふよりは、俺が言ふ事を聞いてくんな。そうしたならば、もふ空へは上がらぬ。そうすると、先づ、雷が一人も減ると言ふものだから、夫の為にもゑゝと言ふ様なものだ。これさ、怖へ事はなへ。こちら向きな」

おかやも嫌と言はゞ、忽ち、夫の隠れ居る戸棚へ鳴り込みそふな気色故、（3）さよころの歌（4）とも出られず、大難儀する。

（1）三方を板などで囲い、中に棚を作って物を載せ、前面の戸を開けて出し入れする家具。（2）この所、飛行中の久米仙人が洗濯をしていた若い女性の白い脛に目を奪われ、神力を失い、地上に落ちたという、古来から有名な説話に拠る（『今昔物語集』巻第十一、第二十四話等）。（3）「さらぬだに　をもきがうへに　小夜衣　わがつまならぬ　つまな重ねそ」（『新古今和歌集』巻第二十釈教歌　不邪婬戒）。（4）という態度にも出られず。

〈二丁ウラ〜三丁オモテ〉

戸右ヱ門女房は、雷につれなくも言いかね、「なる程、それ程に思し召

著作権保護のため図は非表示

〈二丁ウラ～三丁オモテ〉

す事ならば、(1)何の嫌でもなけれども、お前のその形で、その様な怖い顔して普段おいでなさっては、世間の聞こへ、夫の思惑、どふもこれに困りしものなり。どふぞ人間の様になっておいでなさったら、その時はどふとも」と言いける故、雷は、それより、先づ太鼓は(2)浅草の人形店へ売ってやり、虎の皮の褌も(3)丸角へ(4)捨て売りにして、その金にて粋な(5)長い羽織を拵へ、(6)菊寿の帯でも拵へて、先づ形は相応な色男となりしが、どこの髪結床へ頼んでも、角を剃り落としてくれるものなく、これに困りしが、ある時、両国を通りかゝり、薬売りの歯を抜くを見て、これは良しと頼みしに、少し薬を付けて手拍子を打つと、両方の角、一度に痛みもせず抜けし故、喜ぶ。

(権次郎)「(7)反魂丹は後でお召しなさい。それ、後ろからも買はふとおっしゃる。押してはあげるな。(8)茗荷屋権次郎が家の看板、あの大太刀を抜いて、お目に掛ける」

(売人)「はい〳〵」

(雷)「あの歯の抜けるを見ては、角も抜けそふなものだ」

(1) 何も嫌なことはないけれども。(2) 浅草寺内中廓にあった。(3) 本町二丁目(現、中央区日本橋辺)にあった袋物見世の丸角屋次郎兵衛。ここで販売された鼻紙袋、紙入れ、巾着類は通人の間で好んで用いられた。(4) 投げ売り。安く売ること。(5) 着物の丈と殆ど同じような長さの羽織。この頃、通人の間で流行った。(6) 歌舞伎俳優二代目瀬川菊之丞が使用し、安永・天明頃流行した染模様で、菊の花と寿の字を交互に染め出したもの。(7) 芝田町四丁目堺屋で製した薬の名称。霍乱・食傷・腹痛に効き目があった丸薬。(8) 当時、両国に出店を構え、居合抜きと口上で歯磨きを売った、茗荷屋紋二郎(『浮世くらべ』安永三年刊)を当て込んだ命名か。

※権次郎の右足元には、くさり鎌も見える。

著作権保護のため図は非表示

〈三丁ウラ〜四丁オモテ〉

〈三丁ウラ〜四丁オモテ〉

さても、雷は角を抜きしより、(1)大の意気ちょんに髪も結いて、戸右ヱ門が方へ来たり、約束故、おかやを手に入れんと色々くどく。おかやは、雷に難題を言いて帰し、その内、来たらざる故、嬉しく思いしに、存知の外、髪形、形格好、人間となりて、名も(2)庄九郎改め来たりし故、肝を潰し、又、(3)一寸逃れに(4)あやなす。

(雷)「さあ、おかやさん。お前の好みの通り、通人の色男になりやした。これでは、(5)いざこざなしに寝る気であろふ」

(おかや)「なる程、お約束の通り、これから可愛がってくんな。しかし、昼はどふもせはしなくて話もなりませぬから、晩には(6)内で、咄に出さんすから、その留守へお出でなさんせ」

(戸右ヱ門)「あの庄九郎といふ奴は、どふか嘘気味の悪い奴だ。そして、か、あめが俺を(7)めくりにでも勧めて、晩に追い出して、(8)うまい事をしやうで。見限り果てた女めだ」

(1) 大通人のごとく意気ちょん本多髷を結って。「出ず入らずの男女好と結」(『辰巳之園』明和七年刊)。(2)「と」脱か。庄九郎と名前を改め。庄九郎は芝居などで有名な『雁金五人男』の一人、「かみなり庄九郎」に拠る。(3)その場逃れに。(4)うまくあしらう。(5)苦情なしに。(6)仲間内での夜咄。(7)めくりカルタの略。一組四枚十二組四十八枚の札で行なうカルタ博奕の一種。(8)ここでは、情事。

※何故か、ここでは、おかやは鬢差しを入れて髪をきれいに結っているのが、可笑しい。

著作権保護のため図は非表示

〈四丁ウラ〜五丁オモテ〉

〈四丁ウラ〜五丁オモテ〉

戸右ヱ門は庄九郎が帰るを待って、何食はぬ顔にて女房に向かい、「俺は、今夜、約束でめくる所があるから出てくる」と言いしに、(1)存知の外、おかやは肝を潰し、「今夜はどふぞ止めにして下され。さて、他の事でもござんせんが、さっきに来た庄九郎が事、あの人は雷でござんす。いつぞや門口へ落ちた時、色々私を嬲って、嫌と言ったらお前の為にならぬと思い、人間になって来たらば、その時は心に従いませうと、難題を言っておきしに、どふしてか人間の形になって来て、色々無理ばかり言います故、晩に忍べと約束して、先づさっきは帰し、此事をお前に話して、此所を(2)店替へして、(3)鼻を明かせてやらんと思ひまして、晩に来る筈の約束でござんす。どふぞ、来ぬ先に、どこへでも立ち退いて下さんせ」

(戸右ヱ門)「さっきにちらとその事も聞いたが、(4)おのしが心を引いてみょふと思って、今夜出ると言った。そんなら、早く支度をして、店替へとでよふ」

(おかや)「(5)雷の際に、馬鹿らしい奴さ」

(1) 思いの外。(2) 引越し。転宅。(3) 出し抜く。(4) お前の心を試してみようと思って。(5) 雷のくせに。雷の分際で。

〈五丁ウラ〉

夫婦の者は、庄九郎が来ぬ先に、書き置きをして家を空け、何処ともなく立ち退きし後へ、庄九郎来たり。忍び入りて見るに、人気なく、何か一通捨てゝあり。開き見るに、女房が貞節、夫も我を憎しみもなく、住み慣れし家を立ち退くとは、なる程、よく〳〵の事なり。皆、我が邪なる心より起こりし事と、浮世を思い切り、漸ふ此頃、粋に結

著作権保護のため図は非表示

〈五丁ウラ〉

い慣れし黒髪も、(1)我と我が手に下ろし、仏道に入りしは殊勝なり。

(雷)「二人の者、心の内、さぞ(2)難儀なるべし。浮世は夢の世の中。南無阿弥陀がら〳〵」

〈下〉

〈六丁オモテ〉

こゝに又、筑波の雷が女房稲妻は、過ぎし頃、夫の行方知れざる故、色々尋ねしが、今は在り処知れず、他へ縁付きたいには、(3)持参に持ち行く臍もなし。今迄取り貯めたる臍は皆、夫が持ち行、置き去りの身の上、待つ後家暮らしに、折節(4)光らせけれども、さて〳〵光るばかりでは、張り合いの無いものなり。

雨平、雲七と言ふ者、心安く、折節来たり話す。

(雨平・雲七)「お前もまだ若いが、どこぞへ片付きなさればゑゝ。しかし、今時は、持参臍の二三十も無ければ、(5)口が無へす」

(1)自分自身で髪を下ろし(剃り)。(2)つらいことであったろう。(3)嫁に入る際の持参金。ここは雷なので臍という事になる。(4)稲光りと、安永頃の通言「美しい」を掛けた。「ひかる　光と書うつくしき事也」(『胡蝶夢』安永七年刊)。(5)再婚の口が無いよ。

※稲妻は稲光の形をした簪を挿している。

〈六丁ウラ〜七丁オモテ〉

その後、戸右ヱ門夫婦の者は、庄九郎をうるさく思い、店替へして暮らしけるに、二人の者立ち退きし後へ庄九郎来たり、我が邪なる故、人の難儀となり、今は山奥深く身を退き浮世を捨て、発心して名も(1)鳴神上人とて行ない澄ましている事を聞き、二人ながら安堵して暮らしける。

著作権保護のため図は非表示

〈六丁ウラ～七丁オモテ〉

（おかや）「かの雷殿も、今は鳴神上人と名を変へて、尊い出家になられたげな。ほんに、私が様な外聞の悪い、雷さんに見込まれると言ふ話の種でござんす」

稲妻はある夕暮れに、戸右ヱ門が屋根の辺りを光り歩きしに、夫雷が今は出家せし事、鳴神上人と言ふ名まで聞き、心嬉しく思い、しかし、人間の女に迷い、幼馴染の我を捨てたる夫なれば、心を残す事もなし。唯、夫の持ち出でし臍を奪い取り、持参として、他へ嫁入せんと心に喜ぶ。

（1）『鳴神上人北山桜』の世界を綯交ぜする手法が見られる。

※雷より逃れ、平和が戻った戸右ヱ門・おかやの様子が描かれている。それを屋根の上から伺う稲妻、右手に光る玉を持つ。

〈七丁ウラ～八丁オモテ〉

庄九郎、過ぎし頃、黒髪を下ろし、雷を引っくり返し、今は鳴神上人とて、此奥山に引籠り、故郷より持ち来たる臍を壺に入れ、これを封じ込め、日夜此所にて行ない澄まして居給ふに、稲妻は此程、戸右ヱ門夫婦の話を聞きしより、何卒、上人の封じ込め給ふ臍を手に入れんと、里近き者なりと偽り来たる。ここのとこの詞書は、鳴神の上瑠璃の通りなれば、何にも書かず。しかし、上瑠璃の鳴神と違った事は、稲妻は以前の女房なれば、鳴神が見知っている筈なれども、雷は至って物覚へが悪いと見へたり。

（稲妻）「その馴れ初めの始まりは」

（鳴神）「して〳〵どうじゃ、その下の句は。あゝそれよ、俺も忘れた。こゝが物覚への悪いところだ」

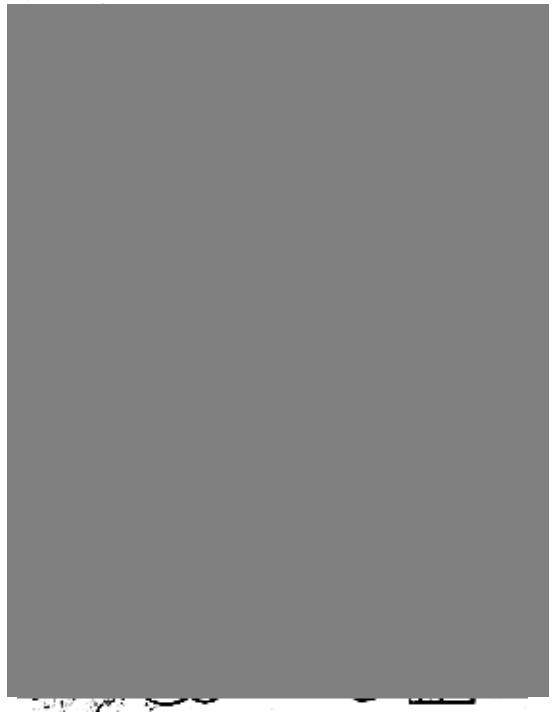
※鳴神上人の後ろには団扇、床の間には臍が入ったと思われる壺が置かれ

著作権保護のため図は非表示

〈七丁ウラ〜八丁オモテ〉

ている。

※この場面は『鳴神上人北山桜』の趣向に拠る。江戸の鳴神作品の基盤とされる寛延四（一七五一）年三月、市村座所演の資料を左に示す。（東京大学総合図書館所蔵、電子版霞亭文庫より）



〈八丁ウラ〜九丁オモテ〉

鳴神上人、以前、雷の時、心安き黒雲は今御弟子となり、黒雲と言い、白き雲はどふいふ訳やら、これも御弟子となり、白雲と言いて仕へしが、稲妻が髪を下ろさん為に、剃刀を取り来たれど、師の坊の言い付けにて、麓に下りたる留守に、(1)稲妻が色に迷い、上人は酒に酔い伏し給ふ。折から、稲妻はかの臍の入りたる壺をばい取り、転けつ転びつ逃げ失せける。

著作権保護のため図は非表示

〈八丁ウラ～九丁オモテ〉

上人目覚めて起き上がり、破戒せしを無念に思い、壺の無きを見て、大きに腹立ち駆け出し給ふを、両僧押し止むる故、右左へ取って投げ、恐ろしかりける有様なり。元雷故か、面色忽ち角生い出で、雷の如くに見へる。

（雷）「女め、そのまゝおかふか。そこ離せ」

（稲妻）「大願成就、有難や」

（1）ここも『鳴神上人北山桜』の趣向に拠る。先と同様、寛延四（一七五一）年三月、市村座所演の資料を左に示す。（東京大学総合図書館所蔵、電子版霞亭文庫より）

著作権保護のため図は非表示

〈九丁ウラ〜十丁オモテ〉

〈九丁ウラ〜十丁オモテ〉

年々同じ様な事なれ共、大晦日はどこもかしこも忙しいは、(1)世上一統なり。戸右ヱ門方にても、少しづゝの(2)買い掛かりを払ふやら、(3)払いを取るやら、宵に乱騒ぎにて漸う終い、亭主は神棚へ燈明を上げ、女房は(4)福茶の釜の下を焚きつけるやら、(5)先づゑゝはと、夫婦炬燵に当たり、煤掃きからのくたびれ、一時にお見まい申、二人ながらとろ〳〵と寝ぶる。

さる程に、稲妻は、かねて心を掛けし臍を取り得、故郷へ帰らんと思いしが、これと言ふも、戸右ヱ門夫婦が話にて在り処を聞き出だしたる故なれば、何ぞ戸右ヱ門に礼をして帰らんと思い付き、戸右ヱ門が至って雷嫌い故、雷避けを授ける。

(稲妻)「これ〳〵、これは節分の豆なり。此豆を(6)初雷の鳴る時食へば、その年中、雷に怖るゝ事なし(7)奇妙なり。もし、此豆が無くなったなら、忘れぬ様に、その年の節分に、豆を取っておいて用いべし。必ず〳〵、疑ふべからず。ぴか〳〵〳〵」

(1) 世間いづこも同じ。(2) 掛けで買った品物の代金。(3) 貸した金を返してもらう。(4) 節分・大晦日・正月等に縁起を祝って飲む茶。山椒・梅干・黒豆を入れて煮出した茶。昆布を入れる所もある。(5) 先ず、これで良いわ。(6)「初雷のときに年越しの豆を食べると雷が怖くなくなる」〔大野誌(神奈川県)〕(『故事俗信ことわざ大辞典』小学館、一九八二年刊)。(7) 素晴らしい効き目がある。

著作権保護のため図は非表示

〈十丁ウラ〉

[redacted]

〈後表紙裏〉

[redacted]

〈十丁ウラ〉

それより稲妻は故郷へ帰り、かの臍一壺を持参として、雨平・雲七が世話にて日光雷が所へ片付き、夫婦睦まじく、夏を待って光る様、鳴る様、あんまり仲が良過ぎては世上の難儀なり。先づ雷の方では、末繁昌して目出度く栄へける。雷の方では、人間の銭金を欲しがる様に、臍を欲しがる故、(1)お子様方も雷の鳴る時、臍を隠してお出でなさい。

(雨平)「おめでたい」

(雲七)「(2)臍一つ程は、きっとしたお土産だ」

清長画

可笑作

(1)「かみなりをまねて腹がけやつとさせ」(『誹風柳多留』初編、明和二年刊)。(2)確実に臍一つ位はお土産に貰えるだろう。

※持参臍の横に雷の太鼓が九つ重ねてある。これも持参品であろう。

〈後表紙裏〉

ちんせつ下

絵題箋(原題簽)。三色刷り。

六丁オモテの内容を示す画。

珍説　雷　姻禮　下　はん元

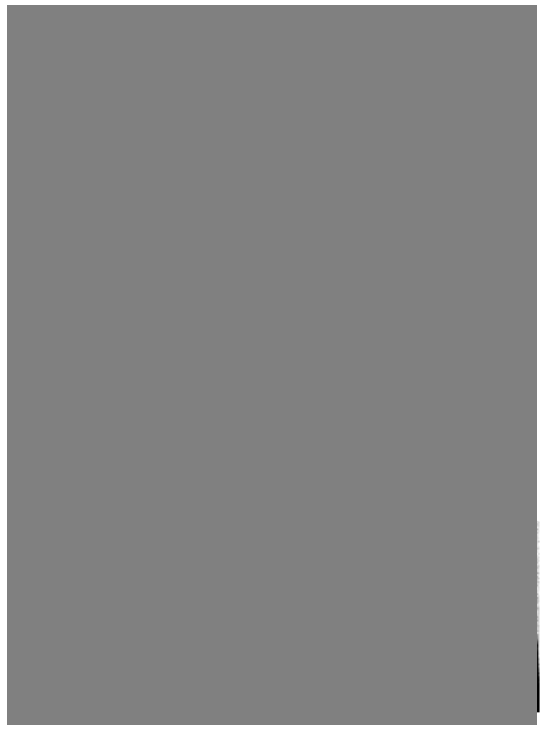
岩戸屋

文字題簽(原題簽)。色は薄い紺。

※本来、絵題簽と文字題簽は、前表紙に貼付されているものであるが、底本の加賀文庫本では、後表紙裏に貼付されている。

〈後表紙〉

著作権保護のため図は非表示



〈後表紙〉

原表紙。

最後に、大田南畝編『岡目八目』（天明二年刊）の評を記しておこう。本作は「若女形之部」で「上上吉」の位に据えられている。（　）の中は、園田注）

頭取戸右衛門女房おかやと成　わる口さよごろもの歌といふ所を、さよごろの歌とかいてあるが、ごろ〳〵といふ事欤（そういう事であろうと思う）。たゞし落字欤　頭取ェヘン〳〵。二役かみなり女房いなづまにて、いなづまのかんざしよし。扨なるかみのまくまで、よさはよいが、ちつと末がつまらぬ。なるかみはどこへかいつたと、お見物のおうたがひも御座らうが、そこがくもをつかむやうなちんせつ、尤〳〵（さすがは南畝で、頭取の言葉によってうまく収めている）。

〈参考文献〉

○滝沢馬琴著『著作堂一夕話』（日本随筆大成第一期第十巻、吉川弘文館、一九七五年刊）
○朝倉無聲著『見世物研究』（思文閣出版、一九七七年刊）
○戸板康二著『歌舞伎十八番』（中央公論社、一九七八年刊）
○『故事俗信ことわざ大辞典』（小学館、一九八二年刊）
○濱田義一郎校注『誹風柳多留初篇』（現代教養文庫一一三五、社会思想社、一九八五年刊）
○『大田南畝全集　第七巻』（岩波書店、一九八六年刊）
○井上隆明著『江戸コマーシャル文芸史』（高文堂出版社、一九八六年刊）
○『日本伝奇伝説大事典』（角川書店、一九八七年刊）
○延広真治監修・鈴木俊幸編『シリーズ江戸戯作　唐来三和』（桜楓社、一九八九年刊）
○岡　雅彦校訂『滑稽本集［一］』（叢書江戸文庫⑲、国書刊行会、一九九〇年刊）
○朝倉無声著『見世物研究　姉妹篇』（平凡社、一九九二年刊）
○『新古今和歌集』（新日本古典文学大系十一、岩波書店、一九九二年刊）
○『今昔物語集三』（新日本古典文学大系三十五、岩波書店、一九九三年刊）
○花咲一男著『柳川江戸名物図絵』（三樹書房、一九九四年刊）
○大久保忠国・木下和子編『江戸語辞典　新装普及版』（東京堂出版、二〇一四年刊）

〔付記〕本稿執筆にあたり、掲載を許可して下さいました東京都立中央図書館特別文庫室に深謝申し上げます。また、東京大学総合図書館所蔵本につきましては、電子版霞亭文庫を利用させていただきました。お礼申し上げます。

（附）前稿「黄表紙作者伊庭可笑についての基礎研究」追記

山東京伝作画『手前勝手御存商賣物』（天明二年刊）三丁オモテの書き入れ「つう笑丈可笑士のさくにもすごひのがあるて」に付された水野稔氏のご指摘「士は士分の人としての敬称であろう」（注1）により、『寛政重修諸家譜』（内閣文庫所蔵、「国立公文書館デジタルアーカイブ」より）を検したところ、可笑に関する記述を見つけることが出来た。以下にそれを記す。（●は家督を継いだ者）

伊庭

●正要
　市兵衛
　享保三年十一月御徒にめしくはへられのち支配勘定に轉し元文四年八月二十七日班をすゝめられて御勘定となる
　寶暦三年正月晦日死す年六十三法名日應四谷の理性寺に葬るのち葬地とす
　妻は森田氏の女

●兼季
　惠兵衛
　母は森田氏の女
　元文五年六月二十二日御勘定となり寶暦三年四月三日遺跡を継のち評定所の留役をつとむ明和四年七月八日さきに科條類典を撰せらるゝのときその事にあつかりしにより黄金一枚を賜ふ六年八月十四日御切米手形役に轉す寛政元年七月十七日兼季久しくひとりにてつとめしにより黄金一枚をたまふ九年閏七月十四日御裏門番の頭にうつり加恩ありて廩米百俵月俸五口の禄となる十年五月二十九日死す年八十七法名日新
　妻は藤堂和泉守家臣関庄七正忠か女

某
　要人
正致
　門三郎
　鈴木傳内正移か養子
正道
　庄右衛門
　高濵彦右衛門某か養子となり後病によりて家に帰る
正啓
　余所五郎

某
　勝之助
當登
　猪與八
　母は正忠か女
　寶暦十二年九月二十八日御勘定となり安永七年九月十九日務を辭し天明二年六月三日父にさきたちて死す年三十七法名要山
　早世

妻は福知百助信勝か女
道羽（みちのふ）
次郎兵衛
関口九郎兵衛道偕か養子
滿榁（みつのり）
他三郎
大井彦十郎長勝か養子
女子
女子
山角貞之丞久林か妻

●

當隣（まさちか）
鉄太郎
母は信勝か女
天明二年十二月二十二日はしめて浚明院殿に拜謁し八年八月十八日御勘定となり寛政十年八月三日祖父か遺跡を継（時に三十四歳 慶米百俵月俸五口）
妻は中根喜四郎益興か女
道由（みちよし）
喜之助
関口次郎兵衛道羽か養子
女子
正季（まさすえ）

冨之助
母は益興か女
直忠（なをただ）
利七
向山三右衛門直知か養子
某
定五郎
家紋　丸に重釘抜　鍬（すはま）　三龜甲

これにより、可笑（猪與八・當登）には、妻（福知百助信勝女）・子（鉄太郎・當隣、喜之助・道由）のあった事、宝暦十二（一七六二）年九月二十八日に御勘定となるも、安永七（一七七八）年九月十九日に致仕した事、天明二（一七八二）年六月三日に、三十七歳の若さで死亡した事が分かる。

この『寛政重修諸家譜』編纂に当たり、同家より幕府へ提出したものと考えられる資料が『諸家系譜』（内閣文庫所蔵、「国立公文書館デジタルアーカイブ」より）にあり、そこにはより詳しい記述が見られる。以下、その内容を示す。（（）の中は、園田注）

（略）
當登（マサアツ）　猪与八
母　右同人女（藤堂和泉守家来　関庄七正忠女）
妻　福知百助信勝女（小普請組 岡野外記支配）
宝暦十二午年九月廿八日仰部屋住御勘定松平右近将監殿傳
安永七戌年九月十九日病気ニ付願之通御奉公御免被下旨御同人江

仰渡候段安藤弾正少弼申渡
天明二寅年六月三日死三十七歳葬同寺号玄如要山
（略）
當隣（チカ）　鉄太郎
母　福知百助信勝女（小普請組岡野外記支配）
妻　中根喜四郎益興女（小十人三浦和泉守組）
明和二丙年二月廿日生　江府
天明二寅年六月三日父病死仕候ニ付同月廿七日祖父嫡孫承祖米願
（略）
右之通御座候以上
本国　近江
高百五拾俵　生国　武蔵　拝領屋敷下谷御徒町中ノ町御座候
内弐拾五俵　御足等
三十五歳
寛政十一未年十二月　伊庭鉄太郎（花押）

つまり、可笑は生涯部屋住みであり、病気のため致仕し、その四年後、病没したのである。

また、『武鑑』（国立国会図書館デジタルコレクションより）では、父・恵兵衛の役職と住まいの変遷を辿ることが出来る（左記に列挙）。

○『宝暦武鑑』（宝暦九年、須原屋茂兵衛蔵版）
巻三の十五丁オモテ
御勘定留役　こま込
○『宝暦武鑑』（宝暦十一年、出雲寺和泉掾版）
巻三の十三丁オモテ
同（評定所）留役御勘定　すかも新やしき
○『大名武鑑』（宝暦十三年、須原屋茂兵衛蔵版）
巻三の十五丁オモテ
同（評定所）留役御勘定　七十表五人ふち　すかも新やしき
○『大名武鑑』（安永三年、須原屋茂兵衛蔵版）
巻三の七十丁ウラ
御切米手形改　七十表五人フチ　浅くさとりこへ
○『大成武鑑』（安永七年、須原屋茂兵衛蔵版）
巻三の六十九丁オモテ
御切米手形改　七十表五人フチ　浅くさとりこへ
○『大成武鑑』（安永九年、出雲寺和泉掾版）※登録名は「安永武鑑」
巻不明（登録は五巻）六十五丁オモテ
御切米手形改　七十表五人ふち　御蔵前仮屋敷

これらの資料から、可笑は、おそらく生涯、部屋住みの身として、両親・妻子と生活を共にしながら、病弱の身をかこつ事も多かったであろう。出版状況から、可笑は黄表紙の草稿を書き溜めていた事が推測される。彼にとっては、黄表紙を書く事が、少なからぬ慰安となったのではなかろうか。

注

（1）水野稔校注『黄表紙洒落本集』（日本古典文学大系五九、岩波書店、一九五八年刊）九一頁、注二五。